



## 会の告知版

11月 3日(日) 東久留米稲門会のホームページ開設

<http://homepage2.nifty.com/35292/>

1月19日(土) 東久留米稲門会新年会 18:00より 於:成美教育文化会館

2月 3日(日) 東久留米雑学塾(第3回) 「川柳から見た江戸の庶民一後編」

講演 坂本信太郎 早稲田大学名誉教授/東久留米稲門会顧問

15:00~16:30 於 成美教育文化会館

役員会 13:30~14:45 3F大研修室

### [大学・校友会関係]

11月17日(土) 商議員会 安宅名誉会長、太田顧問、帆角副会長出席

11月24日(土) 東村山稲門会総会 高橋会長出席

12月 1日(土) 小平稲門会総会 帆角副会長出席

### [部会]

#### 書道部会

作品展 12月14日(金)~16日(日) 9:00~17:00 中央図書館2F

太極拳部会	12月15日(土)	例会	成美教育文化会館
	1月12日(土)	例会	同上
	26日(土)	例会	同上
	2月 9日(土)	例会	同上
	23日(土)	例会	同上
俳句部会	12月 9日(日)	例会&忘年会	華山楼
	1月24日(日)	例会	中央公民館
囲碁部会	毎月第4日曜日	例会	成美教育文化会館
女性サークル部会	12月8日(土)	例会(会食)	12:00~ アコルデ

## 会長挨拶

— ホームページ立ち上げに際して —

高橋 勤 (36年・法)

この一文はホームページの開設に当たっての御挨拶として、ホームページ立ち上げにたいする私の考え、目的等を述べたものです。会員の皆様のご理解、ご支援を宜しくお願い致します。

東久留米稲門会は平成7年4月に設立され、6年が経過しました。設立時の会員は95名でしたが、本年では166名になりました。その間、早大グリークラブの演奏会の成功、また毎年の総会に先立ち講演会を開催してきました。早大元ラグビー部監督日比野弘教授、マラソン界の往年の雄、瀬古利彦氏、作家でテレビでも活躍されているマークス寿子秀明大学教授等々著名な講師を招いての講演を成功させました。部会も女性サークル部会、散策山歩き部会、ゴルフ部会、

俳句部会、書道部会、囲碁部会等が充実した活動を続けています。当会の基礎もあらゆる面で確立し、その方向も定まりました。これは初代安宅会長はじめ諸先輩の功績だと思っています。

現在はIT化時代とも、IT革命とも呼ばれています。素晴らしい通信技術の開発によって、世界のネットワークを結んで、個人が世界に向けて情報を発信し、受信するホームページや電子メールのやりとりが実現し、インターネットの時代が到来したのです。今がホームページを立ち上げるべき時が来たと判断したのです。ホームページを開設するに当たって考えなければならないことは、常に新しい情報を提供することです。当会では「東稲ニュース」も発行しています。そこで編纂されたニュースもホームページに掲載されます。「東稲ニュース」とホームページとが一体になって互いに補完しあっています。

次に今ある部会活動の活発化と同時に新しい部会を設立してゆくことが、ホームページと「東稲ニュース」の内容を豊かにすることになります。新しい部会は太極拳、グルメ、麻雀、郷土史研究、カラオケ等々が新設されています。また、東久留米雑学塾を開講しましたが、ホームページは講演録を内外に伝えることも大切な手段となります。

本会の目的はなにか、私は会の運営の目的は、対内的には母校を同じくする校友の輪を広げてゆくことだと思います。会員の皆様と「第二の故郷」作りをしてゆくことです。同時に対外的にはホームページを通じて当会から外への情報を発信して、地域の人々と連携することで価値観の共有が出来れば理想的です。部会活動、講演会等々を広報することで地域の人々が気軽に参加してもらえれば最高だと思っています。一定の共通的な関係において連体し、地域コミュニティが形成出来ればと願っています。

ホームページは地域社会と結びつく重要な役割を担っています。今後、ますますの活躍を期待しています。

## 「2001 ホームカミングデイ&稲門祭」開催さる

21世紀初頭の「2001ホームカミングデイ&稲門祭」が10月21日(日)、早稲田大学キャンパスで開催。本年度の招待対象校友は卒業後50年目、45年目、35年目、25年目に当たる年度の卒業生。当日は5千人を超える校友や家族でキャンパス内や大隈庭園は終日大変な賑わいであった。恒例の福引券抽選会は大隈講堂を満員に埋めて、午後2時から行われた。当稲門会からは27名が福引き券40枚を購入したが、残念ながら上位の賞には恵まれず、8名(8枚)が「ふるさと賞」などの賞品を獲得したにとどまった。

## 奥島総長杯第二回全国支部ゴルフコンペティション開催

早稲田大学校友会主催の”第二回奥島総長杯ゴルフコンペ”が、飯能市の久邇カントリークラブを借切り、11月12日(月)に実施されました。雨天決行の通知でしたが、薄曇りで汗ばむ程度のゴルフ日和に恵まれました。

参加者は全国支部・東京23区23市の校友会の方達で、スタッフ等お世話下さった方を含め総勢230数名でした。当東久留米からは川上昇一氏、太田晴之助氏、福田稔が参加しました。

成績は新ペリア個人戦で、優勝はgross 81、net69.6で渋谷区代表の校友でした。当会代表の成績は、西コースで43を出した太田氏が上位を占め、川上氏、福田は中位でした。賞品はノートパソコン、ペア往復航空券、ホテル券等大変豪華版でした。東久留米は確率良く二人が飛び賞に入りご満悦でした。プレイした216人の方々とも和気藹々楽しく歓談しました。(福田記)

## ホームページの開設

製作責任者 松崎 博 監事

東久留米稲門会のホームページを開設して一ヶ月余が経ち、ホームページのアクセスカウンターは263を示しています(当会のホームページを見た累計人数が263名)。まあまあ出来栄えとの

評価をいただきひそかに安堵しているところです。

ワードが出来れば(実際にはろくに出来ませんが)ホームページは出来ると言う記事を思い出し意を決してお引受けしてはみたもののパソコンの方式、処理・通信速度、画面の大きさ等のバラツキに如何に対応すべきか、新たな接続業者の選択と接続、ホームページ全体のイメージは、個々の構成はどうすべきか等々全てゼロからの出発でした。

東久留米稲門会はホームページを開設している他の早稲田大学校友会と肩を並べることが出来るようになりました。皆様のご協力に深く感謝致します。引続き魅力あるホームページとして維持発展を図るため、皆様のご協力をお願い申し上げます。

\*記事(写真を含む)の提供

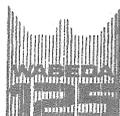
\*より多くの皆様がホームページの閲覧可能(電子化時代到来への積極的対応)

\*ホームページの知人、友人への紹介(世界中のどこからでも閲覧可能)

URL\* <http://homepage2.nifty.com/35292/>

(\*yahoo等で「東久留米稲門会」の検索が可能)

「東稲ニュース」とホームページは、相互に隔月でそれぞれ発行、更新され、役割補完をして最近のニュースを出来るだけ早く提供出来るようにしております。



## 早稲田大学125周年記念事業募金

本会は募金への協力として最低寄付限度を設定し、現行の年会費3,000円を今年より2,000円値上げして、この分を大学に寄付しています。

本年度の本会からの寄付金合計額は296,000円です。10月11日に寄付致しました。会員皆様のご協力ありがとうございました。御礼申し上げます。

つきましては、大学より会員皆様に125周年記念募金のダイレクトメールが12月早々に届くかと思えます。大学当局の希望募金金額は「一口1万円、複数口を8年間継続して」と期待しています。直接大学当局の募金に、母校の発展を願ってご協力お願い致します。

## 同好会便り

### グルメ部会

10月27日午後、第一回グルメの会が催された。参加16名(うち同伴者1名)は、西武新宿線小平駅から迎いのマイクロバスに揺られておよそ15分、玉川上水沿いにある雑木林にかこまれた閑静なたたずまいの「いろりの里」に到着。

水車と石畳の小径と苔につつまれた日本調庭園で野点もどきの「お薄」をいただいた後、庭園の眺望がすばらしい会室に移動。神田部会長のグルメ部会発足の経緯報告に続いて高橋稲門会長の乾杯の音頭でグルメ本番の開始である。

コースはミニ懐石「遊山」。ミニと言えども小平特産のブルーベリーのリキュールから始まるコースメニューは、ほんのり松茸の香を漂わせた土瓶蒸し等かなりの品数がそろって質量共に満足のゆくもので充分堪能出来た。遅い昼食による空腹感もあって、昼酒のまわりも心地よく、会話の方も大いに弾み、所定の2時間もあっという間に過ぎ去ってしまった。

終わりに、これからもグルメ探索をもっともっと奥深くつき進めて行くことを確認しあって、帰りのバスに乗り込んだ。楽しい午後の一刻であった。(土屋記)

### ゴルフ部会

11月6日(火)、夜来の豪雨が嘘のようにやみ、恒例の秋季コンペが秩父の廣濟堂埼玉ゴル

フ倶楽部で開かれた。白石さんの同期で現在熊本に住む高木さん(熊本市稲門会員)の特別参加もあって参加者は総勢14名。美しく紅葉した木々が輝く素晴らしい天候に恵まれて、元気いっぱいプレーしたが、女子プロのトーナメントも行われるもともと難しいコースである上、夜来の雨でぐっしょり濡れたコースコンディションに悩まされ、終盤の突風もあって、日頃の実力(?)が発揮できず、成績はいまひとつ伸びなかった。あとでわかったことだが、この突風は木枯らし1号だった。

プレー終了後、西武秩父駅近くで元小結玉輝山が営む「玉輝山」でちゃんこ鍋に舌鼓を打ちながら、表彰式を兼ねた打上会を行った。ひと時主の玉輝山が顔を出し洪い声で相撲甚句を披露、打上会はさらに盛り上がった。

優勝者は安宅さん、準優勝者は太田さんで、難コース、難コンディションの下ではやはり実力者が顔を揃えた。(帆角記)

## 書道部会

第一回「作品展」に向けて全部員鋭意準備中です。白楽天の詩「送春」五言絶句の楷書、李白の詩「江上吟」七言絶句の行書を部員二十余名が全員で分担しての作品です。また有志会員による自由課題の作品も併せて展示致します。ご来場をお待ちします。詳しくは別紙折り込みをご覧ください。(松崎記)

## 俳句部会

10月21日(日)昼下がり中央図書館小会議室にて第三十五回句会を開催した。兼題は「星月夜」と「菊」、席題は「小鳥」であった。高評価を得た句(4点句以上)は次の四句。

語りつつ歩を合わせつつ星月夜	大久保泰司
菊人形放つことなき矢をつがえ	太田蔵之助
星月夜白猫の影一閃す	神田 尚計
野菊添え北の国から男爵が	安宅 武一

次回本年度最後の句会は忘年会を兼ねて12月9日(日)午後 市内”華山楼”にて行うことにしている。兼題は「北風」と「鍋もの一切」。左党には創作意欲が自ずと湧く季節であり季語である。酒をこよなく愛す多くの部員がいることから虚子顔負けの多くの佳句が期待される。

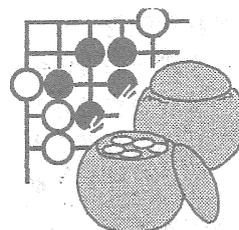
(比護記)

## 囲碁部会

当部回の当面のイベントは11月25日に予定(この会報発行時には既に終わっているが)されている東村山稲門会の囲碁同好会との親善交流試合です。先方は、在籍会員21名の中から6名強の精鋭(?)を募りこちらに乗り込んできます。会場となる成美教育文化会館の備付碁盤では足りず、不足分の調達、更には対局方法など受入準備を急いでいます。

囲碁は、別称「手談」とも云うように、対局を通じてより一層親交が深まることを期待しています。

話は変わりますが、ここ1~2ヶ月間で部員が2名増え、総勢は過去最多の16名となりました。また病気療養中のため1年以上の休部を余儀なくされていた仲間の現役復帰もあり、ますます賑やかになってきました。大変喜ばしいことであります。(辰巳記)



## 女性サークル部会

部会長 大川洋子

初冬の候、皆様にはいかがお過ごしでしょうか。はやいもので、今年最後の例会を12月8日(土)12時よりアコルデ(東久留米駅北口徒歩3分、大門交番前)で開催します。

今回は前会長の長年のご苦勞に感謝の気持ちをこめて、安宅さんをお招きし、楽しく会食したいと思います。

## 太極拳部会

部会長 船尾和三



本年9月発足以来、部会も漸く3ヶ月が経過しました。(立禅で)無念無想に心を静め(八段錦で)呼吸を整え(二十四式で)白鶴のように舞って約一時間半、そこから生まれてくる体と心の健康感(和)、一人一人が体得する和の輪(氣)が広がって、なんとなく皆さんの表情が生き生きしてしまうから太極拳は本当に不思議な運動です。

当初は、教える側も教わる側も右や左のてんでこ踊り、あっち向いてほい、こっち向いてほい「アレッアレッ」「アレアレアレ」これでこの先どうなるの!と腹を抱えて大笑いの連続、この、さすが早稲田マンの早稲田スピリット、稽古も終わり近くなると、皆の気が会場一杯に充満し息のあった見事な演舞(?)になってしまう。

楊名時先生の言葉に「愛おおく」(あせらず、いばらず、おごらず、おこたらず、くさらず)と味わい深い句があります。共に過ごす静かな一時を雑念を捨てて太極拳にゆだねてみましょう。いつからでも自由に参加できます。友人も誘って試してみませんか。稽古は12月1日、15日、1月12日(新年会の会費無料、賞品多数?)、26日、2月9日、23日です。

## 散策山歩き部会

東京近郊の木々がこの秋もっとも鮮やかに色づいたかと思われる11月18日(日)、「御岳大塚山と御岳溪谷を散策する会」に参加した。参加者19名うち女性3名。

青梅線の御岳駅から滝本駅までバス、ここから仰角45度もあるかと体感される(実際は最大25度とか)ケーブルカーで一気に420メートル登って御岳山駅に到着、記念写真など撮ってから歩き始める。幹事が下見を重ねて選んだコースは参加者の平均年齢に充分に配慮されて緩やかな起伏の連続。土の道とその上に降り積もった落ち葉の絨毯が足裏に優しい。

予定より1時間も早く大塚山に到着し、周囲の紅葉や遠くの山並を眺めながら暫し休憩して下山にかかる。再度ケーブルカーで滝本駅へ、ぶらぶら下って御岳溪谷の河原に降り立ち、清流を眺めながらの昼食となる。幹事はやかんで部会恒例の「カップとん汁」に注ぐ湯を湧かすのに忙しい。昼食後ゆっくり休憩、溪谷沿いの遊歩道を下る。急流に遊ぶカヌー、陽光に照り映える紅葉とその下を流れる清流を眺めつつ、隣り合った人と談笑しながら1時間半、快い疲れを覚える頃に銘酒”沢の井”で有名な小沢酒造直営の「わっぱ屋蔵亭」に到着。ここで大きめのぐい呑みごと新酒の利き酒が全員に配られる。利き酒が呼び酒になり易いのは自然の道理に違いない。

朝から清流の大気を吸って浩然の気を養い、鮮やかな紅葉黄葉で目の保養をし、山道小径で足を鍛え、そして仕上げは百薬の長、と将に健康づくりを満喫した錦秋の一日でした。(三田記)

## 郷土研究部会

部会長 高橋哲男

今回は「東久留米」の地名の由来について調べてみました。

東久留米に先立つ久留米村は明治22年に江戸期の8ヶ村(神山村、門前村、落合村、南沢村、小山村、前沢村、下里村、柳窪村)と2つの新田(栗原新田、柳窪新田)に田無の飛地(田無、神山、前沢、野火止)を含めて誕生した。当時は神奈川県北多摩郡に属していたが、明治26年に東京府に編入され、昭和45年に東久留米市となった。

地名の由来についてだが、柳窪村の倉塚窪(現小平霊園内)から湧出し、下里村、小山村、門前村と流れ下る「久留米川」は、落合村で落合川に合流し、新座郡に入ると黒目川と名を変えるが、この川の呼称から来ていると考えられる。一方、黒目川と落合川の合流点より下流を「黒目の里」と呼ばれていたが、この地は現東久留米市所在地と異なるため、市名の由来となったとは考えにくい。また、柳窪の天神社に安政4年(1857年)に建立され、市の指定文化財ともなっている「梅林の碑」があるが、この碑にこの天神社から湧き出ている清水の流れを「来梅川」と云々と記されている。これが「くるめ」の由来とする説もある。

郷土研究部会では郷土の文化財、史蹟を紹介すると共に会員の郷土に関する質問に対して調査研究して回答したいと思っています。疑問質問をお寄せ下さい。

## 「上から読んでも下から読んでも」

三田 三 (会員 S33・政経)

自分で付けた訳ではないが我ながら相当変わったなまえである。三田三と書いてこれだけ。名字が三田で名が三、「どう読むのか」とよく聞かれるが、正しくはサンダミツである。

名前には誠とか賢とか優とか、将来こうなってほしいという願いを込めた字がよく使われる。しかし三にはこれがない。三省堂の大辞林によれば三は「数の名」「二より一つ多い数」「二番目の次の順番」とある。まさに番号でしかない。誠実だ、賢い、優秀だと自分で言ったり書いたりしないで済むのは助かるが、威厳には著しく欠ける。

画数は全部で11画、そして左右、上下、裏表なしである。「山本山」などは相手にもならない。

11画という画数は姓名判断上ではなかなかいい画数らしい。野末陳平氏の著作になる「姓名判断」によると、なんでもこの画数を名前に持つ人はまず食うには困らない、とある。いきていく上で食うに困らないことほどありがたいことはない。庭で朝から晩まで餌を探しては啄んでいる雀が聞いたら飛び上がって喜ぶに違いない。

上から読んでも下から読んでも同じという名前では「家相の科学」などの著書で知られる建築家に「清家清」氏がおられる。この先生が何かのコラムに「親から良い名前を付けて貰ったと思っている。そこで自分の娘には「清家いせ」と名付けた」と書いておられた。「せいけいせ」、なるほどどちらから読んでも同じである。

法曹界に「佐藤藤佐」という相当著名な人がおられたと記憶しているが、どのような経歴の方だったかは失念してしまった。数年前、何気なしに新聞の訃報欄を見ていたら「藤田藤」という名前が出ていた。名前の藤は「かつら」と読むらしい。履歴には元伊藤忠副社長、元ダイエー副社長とあった。

さて、名前はこれくらいにして上から読んでも下から読んでも同じになる回文の紹介。「竹屋が焼けた」「釧路よりよろしく」などは誰でもご存じの簡単な回文である。

もうじき年が改まるとあちこちから新年会の案内がくる。こちらには顔を出してあちらは失礼するという訳にもいかない。「<え、また新年会かい><観念したまえ>」。連日連夜の酒に寝不足も重なって疲労困憊、肩は凝るし首筋は痛むし「身体が戸板みたいと慨嘆し」と言った仕儀ともなりかねない。

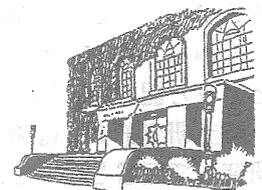
正月が過ぎると日脚も少しずつ伸びはじめ、やがて大相撲の初場所が始まる。大きな屋根を鉄骨で組み上げた戦前の国技館は大鉄傘と呼ばれていた。「寒去って伸びし西日の鉄傘下」これは季語もしっかり入った俳句になっている。次は春の草を詠んで一首「惜しきをぞ 見つらむ草や名は知らじ花や咲くらむ 摘みぞ置きしを」こちらは短歌である。春らしくぐっとくだけて粋に「瓶から爛して入れ あと皆飲み うまいこと酒が効いた 強く抱いてね と また言いぬ いい玉と寝て抱く 酔ったいきがけさ 床 いま海の波と荒れいて 心から甘美」誰が創ったか、大変な労作ではある。

最後に英語の回文はどうだろう。恥ずかしながらこちらは一つだけしか在庫がない。この世に初めて登場した人間は神様がお造りになったアダムである。しかし一人では寂しかろうと次に神様はイブを造られた。アダムにとっては初めて会う女性である。イブの前に進み出て「私はアダムと申します。どうぞよろしく」と挨拶しなければならない。

「MADAM I' M ADAM」と。

## 東稲図書館

創立125周年をひかえて早稲田を改めて振り返ってみよう。



旧図書館

## 「早稲田大学」の象徴

早稲田の前身は「東京専門学校」（通称：大隈学校）で、1902年（明治25年）、専門学校から大学への昇格を機に「早稲田大学」と改称されたことは周知の通りである。

今号では、校旗、校章、角帽、校色（海老茶）の由来など早稲田の象徴に目を向けてみる。

校旗の制定は、教旨・式服・式帽とともに、創立30周年にあたる1913年（大正2年）のことで、この記念式典で初めて披露された。これは、当時の高田学長の秘書、橘静二の発案により、今和次郎がデザインしたものである。式典当日、この校旗を先頭にガウンを着用した教職員が入場した時、会場内は総員総起立総歡呼であったとのことである。

校章の稲穂の数が左右とも19個であることはご存じでしょうか。由来は定かではないが、一説によると、創立年の1882年（明治15年）は19世紀であり、1882を足し算すると19になるところから来ていると言う。

制服制帽が制定されたのは1900年（明治33年）7月11日。最初の学帽は現在の式帽と似て目庇がなく、単に黒い絹の房を垂らしたもので、“座布団”ともいわれた。形はケンブリッジ大学のそれに模し、モールの徽章をあしらった。“座布団”に芯を入れたこの角帽は、間もなく芯が抜かれて丸帽に改められる。明治37年頃、「俺は早稲田の学生であるんである」と大言壮語する偽早大生の出没を憂いた大隈重信は、洋服店主、高島弥七郎に命じて現在の角帽（ピンと四角にはりつつ芯がない）を作らしめた。金モールの徽章とともに商品登録を受けた角帽の裏には姓名、学科名、校印を捺して「早稲田の学生に相違無之候也」と添え、身分証明ともなった。

1905年（明治38年）、早大野球部は安藤磯雄を団長とする日本初の海外（米国）遠征を実現した。これに伴いユニホームが新調されたが、この時初めて校名を海老茶でWASEDAと染め抜いた。海老茶は、メリフィールドがコーチをしていた母校シカゴ大学の校色に倣ったものだが、ここに早稲田と海老茶の結び付きが始まった。また早稲田四尊のひとり市島謙吉によると、海老茶色（Maroon）は早稲田各学科を象徴する紅、白、紫、緑を混ぜ合わせると、見事なマルー ン色になると言う。



## 東久留米雑学塾一講演要約

第一回講演「川柳から見る江戸の庶民」 講師：坂本信太郎 早大名誉教授  
東久留米稲門会顧問

（川柳の起こり）江戸中期、浅草の新堀端竜宝寺門前町に柄井川柳がいた。彼の家は代々名主であったが、40才の時前句付けの選者となった。前句付けというのは、当時大阪で流行っていた一種の俳諧で、七七の字数で作った前句をまず選者が出し、それに応えた五七五からなる付け句を募る言うならば懸賞文芸である。例えば「切りたくもあり 切りたくもなし」の前句に、「泥棒を捕らえてみれば 我が子なり」の付け句で応ずる。前句付けの選者は七七の前句を紙に書いて水茶屋や居酒屋、風呂屋などに掲示する。付け句の応募者は十二文位の入花料を添えて期日までに応募する、選者は優れた句を選出し賞金や賞品を出した。

柄井川柳は鋭い鑑賞眼と当時の人達が持っていた都会的嗜好を敏感に把握する感受性によって名声を高め、応募付け句が数年間に数万句にのぼると言う江戸随一の選者となった。

川柳の弟子、花屋九兵衛と呉陵軒可有(ご了見あるべし)の二人は、川柳の許に集まった数万の付け句をそのまま反古にするのは勿体ないと考え、付け句だけの五七五で十分鑑賞に耐える新形式を編み出し、明和5年(1765年)、「柳多留」に集大成し出版した。ここに選者の名前が由来となって文芸「川柳」が誕生したのである。

(時代背景) 柄井川柳が活躍した当時の江戸の町は、人口百万人を超える世界最大の大都市であった。人口の6割が非生産的な武士でしめられ、残り4割の町人が江戸の生産に携わっていた。時に相次ぐ自然災害や飢饉で、農民一揆などが頻発したため、幕府は大幅減税に踏み切らざるを得ず、従来の7公3民から3公7民に逆転された。結果、生産業の躍進、商品流通の発展に繋がり、町民・庶民の生活は一気に向上し、非生産階級の武士は凋落の一方となる。人々の物の考え方、価値観も大きく変化し、生への喜び、執着を大いに主張する風潮となった。川柳が大きく発展し始めたのはこんな時代状況下であった。

(句の解説—抜粋)

\*講師坂本先生は江戸川柳約5千句に目を通され、その中から当時の江戸庶民の生き様をより反映描写している188句を抜粋されたが、下級武士が詠んだ冒頭40句を紹介解説されたところで惜しくも時間切れとなりました。続編は次回(2月)の塾で講演いただくことになっています。全講演録は続編が完結したところで刊行予定です。ここでは紙幅の関係で3句のみにとどめさせていただきます。

「仕送りが付くとお妾追い出され」

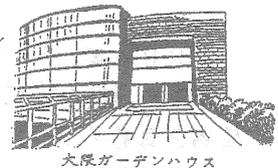
注釈: 仕送りとは大名屋敷や武士屋敷の財政再建担当の役人

「小侍蜘蛛と下水で日を暮らし」

注釈: 小侍は給料が少ないため、蜘蛛(鶯の餌)や下水のボウフラ(金魚の餌)をとるバイトでその日暮らし

「越後屋の前まで傘八入れてやり」

注釈: 当時から、越後屋(現三越の前身)のマークはステイタスシンボルの一つだった



## 東稲広報室

- \* 早大野球部はこの11月創部百周年を迎えた。創立者は日本の野球の父でもある安部磯雄。数々の名部長、名監督、名選手の他、日露戦争最中(明治38年)のアメリカ遠征(26戦19敗)、シカゴ大学との定期戦開始(明治43年)、戦時体制下の”最後の早慶戦”(昭和18年10月16日)、早慶六連戦(昭和35年秋)など素晴らしい伝統の軌跡がこの100年に凝縮されている。
- \* 11月19日春開校する早稲田実業学校初等部の初の入学試験の合格者が国分寺の新キャンパスで発表された。1239人が受験し、99人(男子67人、女子32人)が合格、来年4月5日大隈講堂で行われる初等部第一期生入学式に臨む。(11/20 読売新聞朝刊)
- \* 校友(早大特命教授でもある)篠田正浩監督は、来年1月念願の映画「スパイ・ゾルゲ」の製作に取り組む。早大に製作プロダクションを設置し、早大国際情報通信研究科の全面協力の下、一切フィルムを使わず、すべてデジタルカメラで撮影、大学の最新設備を用いて編集、合成する。  
(11/20 読売新聞夕刊)
- \* JAPAN KOREA SOCCER COLLABORATION: 2002日韓共催ワールドカップを記念並びに両国の親睦を深めることを目的として、早稲田大学と高麗大学、慶応義塾大学と延世大学のそれぞれの連合チームが対戦する。12月15日(土)14:00開始。国立霞ヶ丘競技場。入場無料。

【編集後記】 ○早大野球部が創部100周年を迎えたと言う。編集子は伝説の早慶六連戦に現役時遭遇する幸運に恵まれた一人である。決着がついた最後の日、時の総長大浜信泉先生が、夕闇迫る大学本部玄関段上で長い顔を更にとめて優勝の喜びを語られたことを今でも鮮明に想い起こすことが出来る。次号では野球部員であった太田晴之助さん(当会顧問)に、この100年を振り返ってもらおう予定している。ご期待乞う。それでは皆さん良いお年を!